

陸前國登米郡南方村青島介塚調査報告

著者	松本 彦七郎
雑誌名	東北帝國大學理學部地質學古生物學教室研究邦文報告
巻	9
ページ	1 - "48-10"
発行年	1930-06-28
URL	http://hdl.handle.net/10097/31941

陸前國登米郡南方村青島 介塚調査報告

理學博士 松本彦七郎

緒言

陸前國登米郡南方村青島の部落は低い一丘陵の上にあり。この丘陵の坂の斜面に介塚が發達して居るのである。著者は特に調査した茲に謂ふ青島介塚はその東側の斜面に存するものである。著者は南方村尋常小學校長高橋清三郎氏より本介塚の所在を知り、同氏の東道により當教室より出張して大正七年春及秋の交本介塚の野外調査を遂行して材料を得たのである。茲に同氏に對して深甚の謝意を表するものである。

地 質

この丘陵は松島及附近の山丘を成して居ると同様の岩層を骨子としたもので、謂はば沼澤地乃至低平地の間に島嶼状をなして點在するさる山丘の一である。丘陵の坂の斜面に當つては第三紀以後の地層の發達した所があり、さる地層の一部が介塚を成して居るのである。

介塚の或る箇所の縦斷面にて觀察された地層は上よりの順序にて次の通りである。

一、表層。 黑色土層をなし實際的表現にて全く介殻を含まず、遺物は含んで居る。耕土は本層を主として居れど、本層の處女部は依然遺物層と認められるのである。

二、上部介層。 多くは崩壊し易くなれる介殻を寧ろ少量に含んで居る。この介殻の有無が表層との主なる區別である。遺物を多量に含み、又埋葬人骨骼體を産する。

三、下部介層。 同前の介殻を多量に含んで居る。遺物にも富んで居る。

四、基底層。 淡黝褐色粘土層をなし遺物を含んで居ない。

少しく坂上の遺物なき部分に於ける人工の崖に就て觀察するに、淡黝褐色粘土層は下へは全く漸遷的に厚き褐色粘土層に移行し、上へも漸遷的に黝色土層下部に移行して居る。この形勢に據れば介塚その場所の層に於ても人類の廢棄推積物の加はる事が無かつたならば表層より基底層までが漸遷的に移行した事であらうと考へられるのである。かの厚き褐色粘土層は洪積系地域に於て普通に見受けるさる地層と同様の觀を呈して居る。

土 器

時代相を示すべき土器群は上下を通じて均質であり、従つてその分層的研究の必要を認めなかつたのである。土器は總じて甚だ巨大な甚だ厚手なものが多く、幅廣い凸線帶が殆ど全外表面に亘つて雄大な渦卷曲線紋を描いて居る様なものが主である。把手は個々の土器に就て數少く、多くは甚だ大形にして、手數の懸つた透彫をなして居るのが常である。即ちこの時代相に於て青島式の模式遺跡となつて居るのである。

以下土器の形式を記述する。

牽牛花狀高坯型。 この型なる一個の土器は寧ろ小形にして本體部より判然たる境界なしに移行せる脚が低く且つ急に下に向つて開き、本體部内腔の底も脚内腔の天井もそれぞれの内壁に移行して圓くなつて居り、本體の存する限りなる下部の外表面には頗る粗雜な繩紋がある。黑色の斑紋ある黝褐色を呈し、燒が弱い。大略の脚高一五耗、本體部及脚の推移部直徑三三耗、脚の最大直徑四八耗ある。

尙ほ一個は寧ろ大形にして、脚が寧ろ高く、脚の上半部に於て正しく距離を措いた四個の大なる穿孔があり、本體部内腔の底も脚内腔の天井も圓くなつて居る。幅廣い凸線帶はこれと次第に移行せる凹線に縁取られ、この種の凸線帶が脚の外面の四箇所、に於て鬲の脚狀に下行してかの穿孔をば收容し、その下端が圓く終つて居る。凸線帶區域外なる脚の外面には粗雜な繩紋がある。黝褐乃至黝色を呈し、頗る厚いけれども燒が甚だ弱い。大略の脚高四〇耗、本體部及脚の推移部直徑五七耗、脚の最大直徑八五耗内外ある。

牽牛花狀碗型。 本介塚より得られたこの型には次の三小別型がある。

縵曲口縁婉曲邊のもの。口縁が大きく縵曲し縁邊は婉美な曲線を描いて土器の上半乃至上小部に於ては大きく併も強く内曲して居る。得られた一個は頗る巨大にして口縁部なる縵曲の峯が甚だ低く廣い葉狀をなして特別に強く内にめくり込み、恐らく土器の口全體が歪んで居た事であらう。雄大な曲線紋を描いて居る凸線帶は一對の甚だ強い稜とその間に挟まれた甚だ幅廣い中溝とより成つては居れど、その兩條の稜は各自に可成りの範圍に自由行動を示し、兩條間の間隔乃至中溝の幅が變化性に富んで居る。凸線帶以外の區域には粗雜な繩紋がある。凸線帶の一侧の稜は口縁部の外面に於て一續きの稜となつて略口縁に平行して走り、以て頗る低い襟狀部を區劃し出して居る。この襟狀部には内面は矢張り同じ程の距離の範圍までを含んで丹が塗つてある。黝色を呈し、心層は黝黑色にして當時のものとしては堅い焼である。表層よりの出土である。

尙ほ一個も甚だ巨大にして縁邊が上半部に於て大きく内曲し口が狭まつて居たと認められる。外面の大部分に亘つて甚だ雄大な曲線紋を描いて居る凸線帶は甚だ廣く、土器の下部に於ては稜及中溝の分化が弱いけれども、上部に於てはこれが顯著になり、さる顯著になつた稜は或る箇所、に於て特立の枝を分出し、この枝が渦卷を描いて居る。幅廣い凸線帶の底方へ向つて描いた大なる弧は全體として四個あつたものゝ様である。凸線帶以外の區域までが平滑である。凸線帶及その稜の分出した枝には丹が塗つてある。黝褐乃至黝色を呈し、心層は青黝色であり、稍々堅い焼である。

蜿蜒口縁のもの。口縁は低くして甚だ廣い少數の峯をなす様に蜿蜒し縁邊は下大部に於て緩に外曲し併もこの小別型の一特徴として口縁に近づいた部分に於て軽く併も目立つ様に内曲して居る。一個の土器は曲線紋を描いた幅廣い凸線帶が二條の稜と稜より次第に推移せる幅廣い中溝とより成り、口縁下若干距離の外面に於てはさる稜が一續きに綴られて不規則に蜿蜒しつゝ土器を周つて居たらしく、この稜より上なる口縁部は平滑であり、以下の凸線帶以外の區域には粗雜な繩紋がある。黝色、黝褐色乃至黄褐色を呈し、弱い焼である。

一個は巨大にして、雄大な曲線紋を描いた甚だ幅廣い凸線帶が二條の稜と稜より次第に推移せる甚だ幅廣い中溝とより成り、稜より外へはこれを縁取る溝に當るべきものが稜より次第に推移するやう塗抹された平滑な帶として存する。この平滑な帶より尙ほ外なる區域は矢張り帶狀をなして陰の曲線紋を描き、甚だ粗い繩紋を有する。外面は黝褐乃至黝色、心層は褐色乃至黄色、内面は黄色を呈し、弱い焼である。焼く際の火力が外面のみより及んだものと覺しい。

尙ほ一個も大形にして、凸線帶の代りに太い凹線を以て縁取られた平滑帶があつて雄大な曲線紋を描き、以外の間帶は頗る粗雜な繩紋を有する。平滑帶が却つてその幅の變化に富むが故に、宛も正負を轉倒して間帶なる繩紋帶が曲線紋の主人公なるかの觀を呈する。外面は黝褐乃至褐色を呈し、内面は黒い。心層は内外兩面の色を推移させて居る。焼く際の火力が内面より及んだものらしい。比較的堅い。

波曲口縁のもの。永く後代まで續いた小別型である。本介塚より得られた一個は小形にして縁邊が下小部に於て外曲し、

上大部に於て極めて弱く内曲して居る。口縁下若干距離の外面に一條の細い凹線を周らし、この凹線と口縁との間隔は波曲の峯の區域に當つて大谷に當つて小である。凹線より上は平滑下なる區域の上大半部には細かけれども頗る粗雜な繩紋があり、下小半部は再び平滑になつて居れど繩紋部との間に判然たる境界が無い。底面は幾分中凹である。内外兩面共に黝色、黝褐色乃至黃色を呈する。全高九〇、底面直徑四三、底面直徑である。

原曲邊深碗型。曲邊深碗型と殆ど同様なれど、唯縁邊は土器の上小部に於て弱く外曲して居る。一個は甚だ巨大にして、特に雄大な曲線紋を描いた極端に幅廣い凸線帶は箇所によつて強さに變化ある二條の稜と幅廣い中溝とより成り、又箇所によつて廣く淺い溝に縁取られて居る。稜と中溝とも稜と縁取る溝とも次第に推移して居る。間帶には繩紋ある部と平滑なる部とがあつて、兩部は判然たる境界なく相移行し、平滑部の縁邊部はこれ亦高まつて間帶に於ける稜をなして居る。繩紋は頗る粗大である。外面は黝色の斑紋ある黝褐乃至黃色を呈し、心層及内面は主として黃色であり、唯口縁部の内面だけは赫褐色を呈する。頗る弱い焼である。焼く際の火力は外面より及んだものらしく、唯口縁部だけは内面よりも及んだ様である。

又一個は適度の大さにして、口縁下若干距離の外面に一條の稜を周らし、稜より上なる部分は平滑であり、稜の下縁に沿うては一條の凹線がある。或る箇所には穿孔のある把手があり、穿孔の下限よりは稜に到るコンマ狀の凸線が走つて居る。稜より下なる區域には二條の凹線に縁取られた頗る幅廣い平滑帶と規則正しく密に並べた細き繩條よりの繩紋部とがある。外面は淡黝色の斑紋ある黄灰色を呈し、内面は主として暗黝褐色

である。土器は左迄厚からず、當時のものとしては適度の堅さである。外面は製作中に生じたものであらうと覺しい細かい龜裂がある。焼く際の火力は内面より及んだものらしい。この土器の如きものは恐らくは後の時代に榮えた龍膽花狀碗型の祖型にも當る事であらう。

尙ほ一個は大形にして、外面には甚だ粗雜な概全繩紋があり、唯口縁に近い部分だけは平滑に塗抹されてある。黝色、黝褐色及黃褐色等を呈し、比較的堅い焼である。土器の質は内面に沿うて多數の粗い硅砂粒を含んで居る。

曲邊深碗型。 得られた一個は大形にして、外面に粗雜な概全繩紋を有し、唯口縁に近い部分だけが平滑になつて居る。可成りに厚手にして、外面が黒く、心層が黝色、内面が暗黝褐色である。日常の鍋の如くに使用されたものと覺しい。

上狹曲邊深碗型。 曲邊深碗型に似たれど、土器の最大直徑部が可成りの下方に存し、口に向つて次第に細り、宛も下膨れの筒狀を呈する。一個は寧ろ小形にして、比較的薄く、外面には粗くして粗雜な概全繩紋があり、唯口縁下少距離の外面に一條の稜が周らしてあつて、この稜より上の部分が平滑である。外面は主として黃色にして、黝色の斑紋を有し、内面は淡黝黃色乃至黃色である。焼が頗る弱い。

尙ほ一個は寧ろ大形にして、口縁下少距離の外面には二條の稜と著しく窪んだ中溝とより成る凸線帶を周らし、凸線帶の或る箇所には中溝を跨いだ把手があつたらしい。凸線帶より上は平滑、同じく下へは寧ろ細い繩條よりの概全繩紋がある。外面黒色乃至黝色の斑紋ある、淡黝黃褐色を呈し、内面は斑紋無くして略々同色である。心層は黝色である。當時のものとして

は稀に見る堅き焼にして、火力の作用が心層まで充分に徹底して居る。

婉曲邊碗型。 本介塚よりは凸線帶が極めて強烈に發達した様なこの型が産する。さる一個に於ては上限なる凸線帶の一稜と口縁との間が著しく溝狀に窪み、この溝を跨いで口縁に達する凸線帶よりの把手がある。但しこの種の把手は主なるそれならで副のそれである。外面黝色乃至黝褐色を呈し内面は暗赫褐色である。焼が頗る弱い。

有臍婉曲邊碗型。 婉曲邊碗型と同様ながら、把手とは全く關係の無い臍狀の著しい注口を有する。一個は可成り大形にして、凸線帶よりの曲線紋がよく發達し、間帯には繩紋がある。注口は甚だ太く、その直徑よりも著しく短く、斷面及口徑は横に長い橢圓形を示し、その周邊は土器本體の外面との間に判然たる境界なく次第に相移行して居る。黃褐乃至淡黝褐色にして黑色乃至黝色の斑紋を有する。

鉢狀婉曲邊碗型。 婉曲邊碗型と殆ど同様ながら、唯縁邊は上半に於て豊に内曲した上に尙ほ口縁に近く軽く外曲して居る。口縁直徑は依然として土器の最大直徑よりも著しく小さい。得られた一個は大形にして、幅廣い凸線帶よりの曲線紋が縁邊の彎曲に沿うての上三分の二が程の區域を占めて存し、下三分の一が程の區域には間帯にあると同様に粗雜な一律繩紋がある。凸線帶は全體として曲線紋を描いて居れど、その區域の下限に於ては一續きになつて土器を周り、又把手を除いての上限に於ても曲線の部分部分の組合せとなつて全體として口縁下少距離の所をば一周して居る。凸線帶は凹線に縁取られ、又その縁邊部に於て中溝より極めて徐々に高まれる稜をなし、下限をな

して一周せるものは特別に幅廣くなつて居る。土器の周邊をば四等分するの位置を占めて把手があり、その一個は主なるものとして特別に大形である。これの全體は外面によく膨れた半球狀をなし、その内葉は口縁より突き上つて山形をなしたものであり、外葉は横緒狀をなし、外葉の頂部と内葉の頂點下少距離の部分とが相聯ねられ、以て甚だ大なる間隙を圍み、外葉そのものは甚だ大なる橢圓の孔を有し、内葉もかの聯結部下に於て饅頭形の穿孔を有する。左右なる副なる把手は遙に小形にして、口縁より少しく突き上りて彎曲して少しく斜に下行して上限なる凸線帶に達する紐狀のものより成り、口縁部外面との間に適度の併も尙ほ著しき隙間を抱いて居る。間帶は全數九個の島嶼狀の區域に描き分けられ、内描出の都合にて小形となれる二個には繩紋の代りに粗い捺點がある。内面は黒色、黝色乃至淡黝褐色を呈し、最大直徑部より上なる外面は黒色の斑紋ある淡黝褐色である。粗製の土器にはあらねども尙ほ鍋の如くに使用されたと見え、最大直徑部より下なる外面は鍋炭様のものに覆はれて黒い。心層を驗するに火力の作用をば内外兩面より受けて居る。外面より及んだのは察するに第二次的のものであつたであらう。全高一九五糎、把手外の口縁下の高さ一五〇糎、内外最大直徑は主なる把手外にて二六〇糎、内外口縁直徑一九〇糎、内外底面直徑七〇糎、内外ある。

原曲邊碗型。 曲邊碗型と殆ど同様ながら、縁邊は口縁に近く軽く外曲する氣味あり、その外曲は把手部乃至それに近い部分に於て幾分目立つ。得られた一個は口縁下若干距離の外面に部分部分は曲線を描いて居るもの乍ら一續きに聯れる單條の稜があり、稜より下方へは凹線に縁取られた幅廣い平滑帶と寧

ろ細い縄條よりの縄紋ある間帯とがある。把手は大なる山形をなし寧ろ内外に扁平にして緩れた形を呈し大きく斜に穿孔され穿孔の一侧に沿うては把手の頂の外端よりかの稜の聯結點に達する凸線がある。穿孔及凸線ある以外はかの稜より上なる部分の外面は平滑である。兩面及心層共に黄色を呈する。弱い焼である。兩面共に製作中に生じたものと見える細かい龜裂を有する。

曲邊碗型。 得られた一個は小形にして口縁下若干距離の外面には直前型の土器に於て見た様な稜があり又或る箇所と同斷の把手及凸線があつて稜より下方の區域には細い縄條よりの縄紋を有する。黒色の斑紋ある暗赫褐色を呈する。

曲邊皿型。 本介塚産の茲に舉げる土器は巨大な漏斗狀の把手を有する點に於て格別である。一個は大形にして口縁は水平であつたらしく口縁部の内面には山形の斷面を示す一條の隆起が周り口縁と隆起の頂との間は一斜面をなして口縁部としての上内面を形成して居る。口縁部の或る箇所よりは大きな漏斗狀の把手をば斜に外上に向つて突き出しその漏斗は左右相稱的にして上唇よりも下唇が大きくよく發育して居る。漏斗の内腔は不規則形にして横に長い孔を以てかの口縁部内面の隆起の水準に於て土器の内腔に通じては居れど、その通孔の不規則に出來て居る事はこの漏斗が注口としてのもので無からう事を示して居る。漏斗の上内面にはその外口より通孔に到る一條の凸線が走つて居る。土器の外面には太い凸曲線を以て平滑帶と粗大な縄紋ある間帯とが描き分けられてある。外面乃至口縁部上内面は黝色乃至種々の褐色を呈し内面は主として黒い。

屈折邊碗型。 得られた一個は屈折の稜より下方なる外面の上半に二條の稜と廣い中溝とを有する凸線帶より成る曲線紋を有し、屈折の稜と凸線帶との間には仕切られた間帶があり、この間帶と凸線帶の存する區域より以下の部分とには極めて粗大な粗雑な繩紋がある。口縁は或る箇所にて大なる圓頂の山形に突き上つて把手をなし、把手は内面の一半と外面の他側の一半とに彎曲した凸線を有し、且つ大きく穿孔されてある。この主なる把手より大略周邊の五等分區をなす程の距離に副なる把手に當るべき小突起があり、その突起の頂よりは斜に下行する凸曲線が存して屈折の稜に續いて居る。屈折の稜及かの下行凸曲線の下半に沿うてはその直上に粗い壓痕の一系列がある。外面は黝色の斑紋ある、黝褐乃至淡褐色を呈し、内面は主として黒い。焼く際の火力は内面より及んだものらしい。

小桶狀碗型。 土器はその最大直徑以下半徑以上の深さあり、縁邊は大略直邊をなし上に向つて開く事甚だ僅少にして、最大直徑が底面直徑をば僅に超ゆるに過ぎない。得られた一個は極めて小形にして、紋様を有せず、繩紋も最初より無かつたらしい。手作りの跡の凹凸がある。拇指に粘土を着せてこの形を成さしめたものと覺しい。全高三四粍、最大直徑三九粍、底面直徑三五粍ある。

有頸鍋型。 本介塚産のものは土器の最大直徑部の稜に於ける縁邊の屈折が特に強く、又その稜が把手の注口狀部の側邊に及んで蹠狀をなして居るものが多い。一個は頗る巨大にして、かの稜に於ける縁邊の屈折が強く、稜より上なる外面は先づ平滑、下なる區域には稜と甚だ幅廣い平滑な區域とより成る凸線帶と粗雑な繩紋を有する間帶とがあり、兩種の帶は凹線を以て

境されて居る。或る箇所なる把手は頗る大形にして、その外葉の主要部は頗る大なる上下に扁き注口を成し、屈折の稜は注口の兩側邊にまで續いて蹠狀をなして居る。注口の外下面にはその基部を區劃する稜と下唇縁に沿うた稜とがあつて、屈折の稜の延長なる側邊の稜と併せて不規則長四邊形の繩紋ある間帶を圍んで居る。注口の上唇は半圓形の大なる切り込みを有し、切り込みの一侧に於てはその儘に終り、他の一侧に於ては上唇の延長が斜に上行して内葉に會する。内葉は口縁部が山形をなして突き上つたものに該當し、圓味ある低い三角形の大なる穿孔を有する。穿孔に分たれた半部はそれぞれ板狀をなし、穿孔上に於て宛も板の端を重ねた様な形を以て相結合する。注口の上唇の上行枝あると同じ側なる内葉の一半はこの結合に於て内側に位置し、他の一半はかの上行枝と共に殆ど直角の山形を描いて全く圓滑に相連續する。内葉は外葉との間にはかの上行枝に跨がれた大なる隙間が存する。注口の孔は頗る大にして扁く、土器の内腔には全く滑かに移行して居る。外面は青黝色の斑紋ある灰白色を呈し、内面は淡紫褐色を主とすれど、尙ほ把手の頂乃至内面に於て黃色乃至褐色を帯びて居る。兩面とも製作中に生じたらしい細かい龜裂を有する。比較的堅い焼である。

有襟壺胴狀碗型。 土器の概形は宛も壺の胴狀をなして、圓く膨れ、口は小さくして、口縁直徑が土器の最大半徑よりも小である。頸は存せざれど、口縁より適度の距離までの區域が襟狀をなし、以て蓋を戴くに便した形を示して居る。得られた一個は甚だ巨大にして、その最大直徑が口縁直徑の二倍半内外もあつたものの様である。襟を區劃する稜は甚だ強大にして、口縁に平行

に走り、この稜より下外にも大略襟と同じ程の幅ある溝が存して、同じく平行に走り、溝の下限を縁取るものは強烈に發達した凸線帶曲線紋の區域の上限をなせる強大な稜である。或る箇所^{たいこぼし}に於てはかの溝をば穹窿橋狀に誇いでその兩側の稜を連結する甚だ廣く大なる把手があり、把手は四個の非相稱的に排列した圓い穿孔を有し、且つその外面上にまでも曲線を描いた強大な稜がある。頗る雄大な曲線紋を描いた強烈な凸線帶は必ずしも二稜一中溝と限らず、その稜の發現が頗る自由にして變化に富み、凸線帶自身の幅も亦著しく變化して居るのである。間帶は凸線帶の面積に比して狹小であり、寧ろ細かい繩紋を有する。外面は黃黝色、黝色乃至黑色を呈し、内面は黃黝乃至黝色を呈する。把手及凸線帶には丹を塗つてある。精巧な作なれど、燒は比較的弱い。

長頸甕型。本介塚産のものには土器の最大直徑部より頸に向つての細り方が甚だ緩なものより寧ろ急にして肩の張つて居るものまであり、後者は特に特徴的にして優勢であり、且つ特徴ある凸線紋を有するものが多い。これの極端に走つたものは餘計に壺型類に近接する。云はば壺型類完成前の時期にあるを示すものである。

一個は甚だ巨大にして、肩が張り、頸の縁邊の外曲の度も強い。極めて雄大な曲線紋を描いた凸線帶は極端に幅廣く、數條の強大な稜と稜數より一條少き數條の溝と箇所を定めて存する平滑な區域とより成つて居る。或る二間帶間の最短距離部を通過する稜が五條を算し、その中央稜を挟む二溝は共に大なる半月形の壓痕の各一列を有する。間帶は島嶼狀に區劃されて各橢圓形の輪廓を有したらし、寧ろ粗い繩紋を有する。外面は

淡黝黃色内面は淡黝褐色を呈し心層には外側に偏つて淡黝色の層がある。弱い焼であり、焼く際の火力は外面より弱く内面より強く及んだものらしい。土器の質は可成りに硅砂粒を含んで居れど表面はその爲に粗くは無い。

尙ほさる一個も甚だ巨大にして、唯頸の縁邊は左迄外曲せず、頸及胴の區別なく雄大な曲線紋をなして居る凸線帶は幅廣い中溝を挟んだ可成りに變通自在な強い稜より成り、且つ廣くして浅い溝に縁取られ、稜は或る箇所例へば肩を含む區域などにて集合して宛も荆棘狀をなして居る。間帶を周つて或る稜が輕き渦卷をなすものもある。間帶は島嶼狀に區劃されて橢圓形の輪廓を示し凸線帶の廣大なるに比して狹小であり、繩を振り合せて成した様な複成繩よりの繩條紋を有する。外面は黝色の斑紋ある淡黝黃色、内面は濃淡あれど概して黃色懸つた黝色である。焼は弱く、その火力は主として内面より及んだものらしい。内面に沿うて硅砂粒を含んで居る。

尙ほ一個は小形にして、形は第一に述べた土器に似、頸の下半部以下の紋様は第二に述べた土器に似て居る。口縁は水平ならず、恐らく蜿蜒曲して居たらしい。頸の上半部の外面は云はば單一の特に幅廣い凸線帶に擬しかの第一に述べた土器に見たる中央稜及これを挟む壓痕の列ある溝が此處にも縮圖的に表現されて土器を周つて居る。唯前の例に於てはさるものが頸の上部にも下部にも存して併も自ら曲線を描いて居たのであつたが、これに於ては上部にだけ存して併も直線的になつて居るのである。間帶は比較的細かけれど粗雜な繩紋を有する。外面は黑色、黝色及種々の褐色等を示し内面は主として淡黝褐色である。寧ろ弱い焼であり、その火力は兩面より及んだもの

と認められる。土器の質は雜砂粒を含んで居れども表面は粗く無い。

尙は一個も大形にして、似た紋様を示して居る。これに於ては頸の外面の或る範圍の上部が一の特別な帶をなして居れど、強き稜はその下限をなしてのみ存し、この稜より上方には三條の平行した溝があつて、その中央溝以外の兩溝には頗る大なる壓痕の各一列がある。稜より下方の外面には廣い凸線帶の曲線紋があり、凸線帶は廣くして淺い溝に縁取られ、特にその下行するものは二條一組の稜と幅に變化ある廣い中溝とより成つて居る。間帶は島嶼狀に區劃されて長橢圓形の輪廓を示し粗雜な繩紋を有する。兩面共に黃色懸つた黝色を呈し、燒が頗る弱い。

又の一個も殆ど同様の形と紋様とを示せど、かの頸の上部なる特別の帶は上下に一層狭く、その下限をなす稜より上なる三條の溝は一層よく相接近して居る。色も燒も直前に述べた土器と殆ど同様なれど、唯内面は殆ど黃色に近い。燒く際の火力は外面より及んだものらしい。

更に一個は巨大にして特に厚く、かの頸の上部なる帶は尙は一層狭くして、その下限をなす稜以外は全く單なる平滑帶となり終つて居る。かの稜及それより下方の區域に於て雄大な曲線紋をなす凸線帶の稜は強大にして、特に後者は變通自在であり、その或るものは間帶を周つて渦卷をなして居る。長橢圓形の輪廓を示す間帶は複成繩よりの條繩紋を有する。内外兩面共に黝褐乃至褐色を呈し、燒は弱く、その火力は外面より弱く内面より強く及んだものと認められる。

又の一個は中大にして、寧ろ薄く、肩が張つて居れど、その縁邊

の彎曲は甚だ滑脱である。細い凹線に縁取られた平滑帶が圓滑に分岐及彎曲しつゝ頸及胴に亘つて曲線紋を描き、その軽く渦卷いた或る枝の末端は新月狀の高まりをなし、以て凸線帶としての表徴を見せて居る。間帶は不規則の輪廓を示し粗雜な繩紋を有する。外面は主として黃褐色、内面は淡黝褐色乃至赫褐色である。心層は黝色を呈する。焼は幾分堅い。

肩の張り方の少いものゝ一個は中大にして、厚く、重々しく、土器の最大直徑部より上なる外面にのみ凸線紋を有し、その凸線帶は該區域の最大部分を占領して、繩紋ある間帶は其處此處に僅に形跡を留めるに過ぎない状態にある。凸線帶の稜は帶の縁邊部と限らずに走つて曲線を描いて居る。該區域より下方へは一律繩紋がある。繩紋は粗雜なれど寧ろ細かい。外面は黒斑ある黝色乃至黃黝色を呈し、内面は主として黃黝色である。焼は比較的堅い。

尙は一個は中大にして、寧ろ薄く、口縁が或る箇所にて高まりて把手をなし、把手は中括れの大なる穿孔を有し、把手の上面には一端は内面に他の一端は外面に續く中溝が存して、上面觀に於て宛も滑車の一半狀をなして居る。外面には二條一組の凹線に挟まれた平滑帶が自由な曲線紋を描いて居り、その平滑帶は或る限られた箇所に於て高まつて凸線帶としての表徴を見せて居る。口縁部の外面は平滑にして、平滑帶にはその儘に續き間帶に對しては凹線を以て境されてある。間帶には一種の複成繩よりの粗い繩條紋がある。大略黝色を呈し、比較的堅い焼にして、焼く際の火力は内外兩面より及んだと認められる。この土器は外見時代が降りさうにして實は然らず、依然上部介層より産したものと認められる。

完長頸甕型。 長頸甕型に似たれど、胴より頸に向つての括れが頗る急に於て、後者がよく分化し口縁直徑は土器の最大直徑を超えない。得られた一個は中大にして、胴の上部が寧ろ豊に膨れ、頸の外面は平滑であり、胴の外面には稜乃至高まりの不顯著な凸線帶と稍細かい縄紋ある間帶とが大なる正負の渦卷曲線紋を描いて居る。胴の上限に當つては張つた肩を成して圓滑な稜が走つて居る。大略黝褐色を呈し寧ろ弱い焼である。最大直徑一七五耗内外、口縁直徑一五五耗内外ある。

寛口長頸甕型。 土器は充分に深くして、胴と長大な頸とがよく分化し、頸の最小直徑は胴の直徑より少しく小なれども、頸は縁邊が外曲して上に向つて大きく開き、以て口縁直徑が胴の直徑を著しく凌いで居る。得られた一個は小形にして、口縁が蜿蜒曲し、頸の下部の外面には小く圓い捺點の二横列がある。大きく曲線紋を描いた凸線帶は二條の稜と稜より漸遷的に推移せる廣い中溝とより成り、廣く淺い溝に縁取られて居る。間帶に細かい縄紋がある。外面は黝色乃至種々の褐色の斑紋をなし、内面は淡黝黄色を呈する。焼は弱い。

本介塚の土器群には單に器形としても却々に特徴あるものが存する事以上の記載からも察し得る所である。

叔本介塚の如く巨大な然も破損し易い土器を主とするやうな遺跡に於ては、器形に即すれば最も優勢にして特徴的な把手や凸線紋様等が頻度とは及びもつかぬ程の少數回だけ記述に拾收されるに過ぎない事になる。形式が判然と見られるやうな破片は主として小形の土器に屬し、さる小形の土器に於ては得て把手や紋様等が簡略化乃至省略されてあるからである。尙ほ把手に就ては器形と大なる把手とが同時に判然たる様な

破片は稀にのみ得られるに過ぎぬものである事も考慮せらるべきである。

最大多数の土器に於て焼が弱い事も特徴的である。巨大な土器に於て餘計にそれが著しく、土器の質が殆ど乾燥した粘土その儘のやうな觀を呈するものも尠く無いのである。褐色懸つた焼のものに就て云へば赫褐色は單に小斑點として發現するに過ぎない程度であり、淡黝黄褐色乃至それに近い色が最も普通に見る所である。この事實も可成りの範圍にまで焼の弱い事と關聯して居る様である。

特 殊 土 製 品

土製蓋。 土器の蓋として使用されたと覺しきそれである。得られ一個は洋燈の笠狀をなし周邊が垂直の面をなして居り、上面は中凸にして、下面は著しく穹窿形をなして居る。把手の存すべき部分は保存されて居ぬ。全表面が平滑であれど、製作中に生じたものと見ゆる細かい龜裂がある。上面は黝色の斑紋ある淡黝褐色を呈し、周邊の面及これに近い部分なる内面の縁邊帶は淡黝黃褐色、内面の中央部は淡黝赫褐色を呈する。心層は青黝色である。幾分堅い焼である。直徑九〇耗内外、把手を問題外として高さ二八耗ある。全體として軽いものである。

滑車形土器。 得られた一個は直徑五二乃至五四耗、厚さ一六耗、中央の穿孔直徑一〇耗程のものである。穿孔は軽く中括れである。兩面に於ける穿孔の縁邊には穿孔の折に粘土が持ち上つたと覺しい高まりがある。兩面共に穿孔を周る細かい捺點の一行と周縁邊に沿へるそれとを有する。周邊の面は勿論滑車の溝狀の中溝を有する。この中溝には特に磨滅した痕跡が無い。黝色を呈し、黒色の斑紋がある。紡車にでも取り附けた一種の實用品であつたかと思はれる。

有紐土製圓盤。 土製の圓盤にして一方の面の中央部に鏡鑑の紐狀の把手を有するものである。得られた一個は少しく卵圓に近い圓盤であり、一面は餘計に平坦であり、他の一面は僅に中凸になつて居り、この面の中央部には正しい中心よりは僅に偏つて紐狀の把手が存する。紐孔は大きくして、大略橢圓形であり、紐の同じ側の兩の裾は弧狀の稜を以て聯ねられ、この稜が紐脚と相待つて紐孔底を圍んで居る。周邊は圓味を帯びて居る。

作りが寧ろ粗雑にして、平滑なるべき面にして凹凸がある。黒色黝色乃至種々の褐色の斑紋を示して居る。長徑一九三耗短徑一五三耗、把手を含んだ厚さ三八耗、盤の本體の中央部に於ける厚さ一八耗、紐の幅二一耗、紐孔の長徑二〇乃至二四耗、同短徑一三乃至一六耗ある。重々しい作りである。

有刻紋土製圓盤。 土製の圓盤にして、一方の面に凹線紋を有するものである。得られた一個は低い饅頭形にして、一面は平坦、他の一面は軽く中凸である。中凸なる面の抑もの縁邊には一條の刻線があつて宛も周邊の面をば區劃し出し、又その主要部を占めては二條一組の刻線を以て卍字形の無限輻射同形の曲線紋をば描き出して居る。卍字の一軸は完全な左S字形を呈し、他の一軸の兩腕はそれぞれ左S字の半分宛の形をなせども、一續きの字形をなす様には相對せず、相互にずれた位置を取つて居る。軸乃至腕の末端部は圓く膨れて居る。主として淡黝黃褐色を呈し、弱い焼であれど、表面が滑かにして艶々しい。直徑七八耗、内外厚さ一八耗ある。ともすればこの型はかの幣の一種に用ゐられたかとも見える錢形土器に對して遠い祖型であつたかも知れぬ。

茲に述べた様な兩種の土製圓盤は恐らく宗教上に用ひられたものであらうと思はれる。圓形のものに對する宗教的念慮の發動はその根據附けは兎も角として東洋人——實は東洋人ならずもなれど——には理解し易かるべき事に屬する。塗丹した圓石の如きもこの種のものと同系なるべく、又圓き岩版及土版の如きもさるものと考へ得らるゝ事であらう。

土製耳飾。 埋葬人骨に屬して居たものゝ二例が得られ、共に鼓胴形なる型のものである。第四號人骨に屬するものは特に

大形にして、前後長二二耗、一端面の直徑二七耗ある。前後の兩面に通ずる孔も勿論中括れであり、兩面に向へる漏斗狀部と括れた中途部とは判然たる境界なしによく移行して居る。黝色の焼にして、塗丹してある。

第六號人骨に屬するものは前後長一一耗、兩端面の直徑一六耗半ある。兩面に通ずる孔は椀の内腔狀に抉り抜かれた漏斗狀部と頗る小なる穿孔として存する中途部とより成つて居る。黝色の焼にして塗丹してある。

是等の述べ來つた土製品の内、有紐及有刻紋土製圓盤は共にその最も珍しきものなる事に於て重要である。土製耳飾は特に大形のものが迄存する事は注意に値すべく、又埋葬人骨にして土製耳飾を帶びた儘に發見せられ、以てこれが用途を確認するに到らしめた最初のものは實に本介塚に於けるそれであつたのである。

石器乃至石製品

圓石。 この名稱下には用途より云へば種々のものが含まれるべきである。本介塚産の茲に挙げる一個は頗る規則正しい鏡餅に似て厚い圓盤狀の自然礫にして、一方の面の中央に不規則に窪んだ打痕の存するものである。礫は安山岩と覺しく、帶綠色にして長石の白斑を有し、自然の表面が艶々しい。中央の打痕あると反對の面の大半は周邊より打つて打ち缺かれてある。縦斷面は長橢圓形を呈し、直徑一二〇耗内外、厚さ五〇耗を算する。この圓石は宗教上に用られたものと覺しく、使用後に打ち缺いたものらしい。

石鏃。 勿論凡て打製である。材料としては蛋白石、玉髓等の珪石類を主とし、又到來品と見ゆる黒曜石もある。手許なる全數六個の内、唯一個だけが有柄型に屬し、他の五個は凡て無柄である。前者に於ては鏃身の兩側刃と基柄の兩側縁とが併せて菱形を描き、肩の突出が適度にして、外後に向つた逆鉤をなす様にはなつて居ぬ。無柄のものは高き三角形を呈し、後縁なる底邊が中凹にして、兩の肩は外後に向つて突き出した逆鉤をなし、て居る。無柄のものゝ多い事には若干の意義がありさうである。

石錐。 得られた一個は基部に扁平な把手を有せぬ型である。見事な出來にして鋭く、全長三六耗、基部に於ける最大幅八耗、最大厚五耗ある。

打製石庖刀。 扁平にして長矩形乃至それに近き形の打製石片にして、その一側縁に刃を有するものである。得られた一個は長短形の一邊が短き二邊を以て置き換へれた様な形の長五

角形を呈し、一面は単一の裂開面に占められ、他の一面は縦に走る中稜をなして相會する二個の細長矩形の裂開面に主として占められ、一側縁の刃をなす小裂開面の列はこの面の側にのみ存する。刃部以外の周邊は主として自然礫であつた當時の表面を存する。全長七五粍、最大幅五四粍、最大厚一四粍ある。刃を然るべく向けてこれを右手に持てばよく手に合ふ。

石匙。本介塚産のものは把手が全く存しないか又は把手の分化が不充分である事に於て著しい特徴を見せて居る。次に述べる様な小別型がある。

矮小庖刀狀のもの。宛然庖刀形なれども甚だ矮小なる無柄石匙である。得られた一個は全長二八粍、最大幅一五粍、最大厚四粍に過ぎず、刀背の後半部と後端縁とは刃をなさず、その他の周邊は刃をなし、刀背の前半部及前端縁は双刃をなし、兩の面に小裂開面の列を有する。目立つ大さの裂開面は一面に於て一個、他の一面に於て二個ある。矮小なるにも拘らず刃は鋭い。

扇形無柄のもの。打裂によつて容易に得られるべき三角形半月形乃至扇狀の石斤の原形をば左迄變化する事無しにその廣く開いた一邊を刃としたものである。後の時代迄續いた小別型である。一個は全長四八粍、最大幅三五粍、最大厚八粍あり、刃部の小裂開面の列は一面にのみ存する。又一個は全長五六粍、最大幅三四粍、最大厚一一粍あり、上後縁のみは刀背狀の面を有して手に持つに適し、上前縁及底邊なる下縁は共に刃をなし、て圓く彎曲しつゝ相移行し、下縁に於ては双刃になつて居る。大なる裂開面は一面に一個、他の一面に二個ある。

兩刃刀子狀のもの。細長くして刀子狀をなし、その兩の側縁に刃を有し、把手は全く存しないか又は不完全に分化し、後者の

場合と雖も突出してよく括れたやうなものでは無い。一面は單一の裂開面に占められ、又は片刃にして、刃部の小裂開面の列はこれとは反對の面に存する。一個は長三角形にして、全長六三糎、最大幅二九糎、最大厚九糎ある。又一個は大略柳葉形をなし、全長六三糎、最大幅一八糎、最大厚六糎ある。尙ほ一個も細長くして、前端が寧ろ鈍く、後端部には一側に切り込みがあつて、把手が分化し初めて居る事を示し、全長七〇糎、最大幅一九糎、最大厚五糎ある。

石製臼。大形の石片に大形の腔を抉り抜いたものである。本介塚からは硬い細礫岩製のさるものが得られて居る。

長方形兩頭打製石斧。この名稱がその儘定義となつて居るやうな型である。北上山地の古生界より得らるべきやうな變質硬砂岩の板に割れ易い性質を利用して、これを適當の幅及厚さのものとし、その兩端を打ち折つて鈍き刃としたものである。極めて粗雜素朴に作りなしてある。中途部の或る面には柄に結び附けるに便したやうな刻線がある。得られた一個は全長二〇〇糎、幅七〇糎、内外最大厚三八糎ある。この型は戰槌として使用されたものであらう。島田形のさるものに對するも一層原始的なものに見える。

長矩形磨製石斧。上に向つて狭まつた長矩形にして、肉薄に出來て居るものである。刃は兩面より研ぎ、云はば双刃である。一個は全長五〇糎、刃部幅三一糎、頭端幅二〇糎、最大厚一〇糎ある。流紋ある濃綠色の美しい石質にして、宛も出雲瑪瑙に對する様な感じがする。又一個は全長四五糎、刃部幅二六糎、頭端幅大略二一糎、最大厚八糎あり、稻井石より出來て居る。是等は共に矮小石斧の例とも見られる。

鈍頭肥身磨製石斧。 細長矩形にして、上に向つて狭まれど、頭端は尖らず、甚だ厚くして、最大厚は頭端幅以上あり、又刃部幅の半分以上もあつたらしい。この型は遠く後代に續いて遅れて榮え、且つ同時に榮えた尖頭のさるものに對して祖型であつた様である。得られた一個は變質硬砂岩より成り、頭端幅二二耗、頭端下六〇耗の所に於ける幅四〇耗、同じく厚さ三〇耗ある。

長矩形磨製石片。 本介塚産の一個は實によく石斧の原形を保ち、唯刃部縁に於ける刃をば圓く磨滅させてある事だけが眞の石斧よりの區別點となつて居る。頭端縁も刃部縁も正面觀に於て軽く圓く中凸して居る。刃部縁の一端が恐らく故意にであらう打ち缺かれてある。材料は稻井石らしい。表面の層が使用後既に著しく風化して居る。全長一〇七耗、刃部幅六〇耗、頭端幅二八耗、最大厚二三耗ある。

單刃有背溝石刀。 磨製にして、刀身が上代の直刀に見る如き形をなし、切先が鈍く終り、その刀端縁をなす面と刀背の面とが緩き彎曲を描きつゝ、相移行し、刀端縁と刃部縁とは直角より少しく小き角を以て會合して居る。刀背の面より刀端縁をなす面に及んで一條の溝が刻まれてある。刃は兩面より研磨してあるが鈍い。得られた一個は折れた刀身をば再び使用した形跡あるもので、現存全長一九八耗、刀幅三八耗、刀厚一四耗ある。最厚部は刀背と中央部との半途乃至略々中央部を走り、刃の研磨面は兩面共大略刀幅の三分の一程に及んで居る。材料は稻井石である。

磨製石槍。 得られた一個は長き基柄を有し、槍身と基柄とが漸遷的に移行し、前者は扁平にして廣く、後者は狭い。基柄は後端には斯く細く削り上げて、後に餘つた長さを切り捨てた痕が

ある。切り捨てた方法は両面に相對するやう各一條の横溝を刻み、然る後に力を以て折り取つたのである。槍身は兩の側縁に刃を有し、兩の刃共双刃に研磨してある。一面にだけ低く鈍い中稜があつて、槍身の横斷面が大略甚だ低い三角形を呈して居る。槍身より基柄に向つて狹まり初めた點より以降の推移部及基柄合長一四〇耗あり、初めに切り捨てやうとした意志に於ける長さとしてならばこれより一〇耗だけ短くなるのである。槍身幅三八耗、槍身最大厚一一耗、基柄の後端なる最小幅一八耗、基柄厚一〇耗ある。材料は稻井石である。

石棒。得られた二個は共に少しく扁平な橢圓形の斷面を示すものである。一個に於ける太さは長徑三二耗、短徑一九乃至二一耗ある。石棒の作り方は本介塚のものと限らぬ事乍ら、先づ細かく敲いて形を整へ、然る後に研磨すべくは研磨するのである。材料は稻井石である。

動物岩偶。得られた一個は磨製石斧の折れた頭部を利用したかと思ゆるもので、鳥を象つてある。恐らくは水上に浮ぶ鴨の類より着想を得たものらしい。現に普通に見受ける都鳥の表現に似て居る。大體に圓い頭部の前端が僅に角張つて嘴の所在を示し、頭の上面より背面までが一續きであり、咽喉部は括れ、腹部は圓く膨らみ、一側面に於て眼點が刻まれてある。自然に擬した姿勢に於ける前後長四一耗、高さ三二耗、幅二〇耗ある。石質はかの古生界のものらしくして、頗る硬い。

本介塚の石器群は却々に特徴あるものを含んで居る。打製石庖刀、石匙、長方形兩頭打製石斧、石斧の原形を多分に保有する長矩形磨製石片、單刃有背溝石刀、及長き基柄を有する磨製石槍等がこれである。扇形無柄の石匙は後の時代にも存したれど、

次の時代から始まる有柄のさるものに對して依然として祖型の位置にある。兩刃刀子狀のものも次の時代から始まる、ある著しい小別型に對しての祖型である。石匙は可成りに固定した型を示して本邦の石器時代の或る大部分に亘つたものであるが、本介塚のものはその單調を破つて特に固定型前の進化相を如實に示して居るのである。かの打製石庖刀は特に原的の石器であつたらしく見え、ともすればこれが石匙への進路を開いたものであつたかも知れぬ。

骨角器乃至齒牙製品

骨針。 本介塚は得られた骨角器の数の割合に骨針に富み、骨針は得られた五個共に針頭に穿孔を有する。次の様な小別型がある。

蝌蚪形をなし、廣き針頭と細く圓き針身とより成るもの。得られた二個の内の一個は針頭が略々橢圓形をなして、これに穿孔を有し、細れる針身の断面は上半部に於て橢圓形を呈し、先端に向つて餘計に正圓に近くなつて居る。全長八九耗、針頭の最大幅八耗、同じく厚さ二耗半、全長の中途部に於ける針身の幅四耗、同じく厚さ三耗半、穿孔の直徑三耗ある。尙ほ一箇は針頭が特に廣く、針頭後半部より針身に向ひ、又針身の基部より先端に向つて狭まるの度が著しい。穿孔下縁より先端までの長さ七四耗、現存針頭幅一一耗半、同厚四耗、中途部に於ける針身幅四耗半、同厚三耗半ある。

針身が比較的太くして、針頭が針身と等しい幅のもの。得られた一個は鹿の尺骨より作られ、骨の面の彎曲の儘に彎曲して居る。針身の大部分に於ける断面は圓味ある三角形を呈し、唯上小部及針頭は扁く薄くなり、針頭は小さくして、刻線及それが側縁に於ての淺き切り込みを以て針身より判然と區劃されてある。全長一五四耗、針頭長一一耗、針頭幅七耗、針頭厚三耗、基部に於ける針身幅七耗、同厚三耗半、中途部に於ける針身幅六耗、同厚五耗ある。穿孔は針頭の大さの割合に大にして、著しく播鉢狀をなし、その直徑が一面に於て六耗、他の一面に於て三耗半ある。

針頭も針身も扁平にして、最廣部が殆ど頭端に近く存し、この最廣部より針身に向つて甚だ徐々に狭まり、二個の穿孔を有す

るもの。得られた一個は針頭乃至針身上半部を示し、その現存の長さ六〇耗あり、頭端部なる最大幅一〇耗半、針頭厚二耗半、頭端下五〇耗の所に於ける針身幅七耗、同厚三耗半ある。二個の穿孔の内、上なるものが最廣部に位置し、兩個共兩面より穿たれたものであり、一面に於ては上なるが三耗半、下なるが四耗半の直徑を有し、他の一面に於ては上なるが四耗乃至四耗半、下なるが四耗の直徑を有する。

針頭及針身が全く分化せず、一樣に扁平にして、頭端部が幅に於ても格別の事無きもの。得られた一個は全長一三五耗前後のものであつたのであるが、現存の長さ一二〇耗あり、穿孔を横ざる針頭幅一〇耗半、同厚四耗、頭端より六〇耗の所に於ける針身幅一〇耗半、同厚四耗半、頭端より六五耗の所に於ける針身幅一〇耗、同厚四耗、穿孔直徑は面を異にして三耗半及四耗ある。鹿の砲骨にて作つたものである。

骨筥。 全長に沿うて殆ど同じ程の幅を保ち、廣くして甚だ扁平なるものゝ一個が得られた。全體が薄く、尙ほ先端に向つて特に頗る薄くなつて居り、基部には穿孔があつたのである。穿孔下縁より先端に到る長さ一六七耗、幅二三耗、一面が軽く中凸、他の一面が淺く中凹なれど、その骨筥體としての厚さは先端上一五耗の所にて漸く三耗、同一五〇耗の所にて六耗ある。鹿の大腿骨にて作られ、骨の彎曲の儘に軽く彎曲して居る。

骨刺。 得られた三個は次に掲げる如く二小別型を示し、恐らく用途が異なつた事であらう。

細長にして薄からぬもの。一個は鹿の前肢砲骨より作られ、頭端面は上關接面を僅に研磨したものに當り、骨の内後隅の稜に沿うて作つてあり、斷面が三角形を呈する。頭端面より裏面

——骨としての内壁——に通ずる揺鉢狀の穿孔がある。頭端部幅一四耗同厚一一耗頭端下一〇〇耗の所に於ける幅及厚さがそれぞれ七耗半穿孔の頭端面に於ける直徑五耗ある。この骨刺は短劍の如くに用ゐられたかも知れぬ。

尙ほ同様の作りなる一個は特に大形であり穿孔を有せず全長二〇八耗頭端部幅一九耗同厚一三耗中途部幅一一耗同厚九耗半ある。この骨刺は下緒に結んだ形跡無く頭部の瘤立つたものが有るにも拘らず柄に結び附けるに格好に出来て居る。骨槍乃至銛として使用された事であらう。

廣く扁くして先端の尖りが鈍きもの。得られた一個は第一にその材料が問題なのである。何分左後肢砲骨の上關接面より初めて内後隅縁乃至内面にかけての一部らしいのであるが、鹿に屬するものとしては骨の面も骨質の排列を示す自然の條理の走り方も餘りに彎曲し過ぎて居るのである。勢ひ或は野牛の骨では無からうかと疑はれるのである。全長一四二耗頭端部幅二六耗同厚一四耗中途部幅一九耗同厚七耗ある。この骨刺はともすれば籠の如きものを編むに用ゐられたらうかも知れぬ。

牙製釣針。恐らく猪の牙と見ゆるものゝ齒質部をば利用して作つてある。釣針の絲に結ぶ頭端部に僅に珧瑯質層が存して居るので是が牙製であると判斷し得たのである。小形にして細く釣針の上行枝と下行枝とが可成りに接近して且つ殆ど平行なれど尙ほ上に向つて幾分集射せんとする傾向を示し上行枝は釣針の全長の割合に可成りに長く上に向つて頗る鋭く尖り逆鉤は無い。彎曲部に於ける上下幅は特に著しくなつて居る。頭端部は釣針そのものゝ太さに對して格別の事は無い

が、唯頸部が幾分削り細めてあるので、絲に結ぶに都合よいやうに出来て居る。全長三三耗、下端より測つた上行枝の長さ二一耗、釣針そのものとしての幅九耗半、頭端部幅三耗弱、同厚二耗強、頸部の最小幅二耗半、下行枝の中途部幅三耗弱、同厚二耗、彎曲部の最大上下幅五耗、上行枝の中途部幅及同厚共に二耗半ある。敷設し置いて淡水魚を漁したやうな釣針であつたであらう。

角製筥。得られた四個は鹿角をばその彎曲に合うやうに彎曲した形させて割り取つた細い角棒から作られ、特徴に乏しかるべき構造のものなれど、然も大木式に於て見られたものに比較すれば製作が丁寧であり、割り取つた際の角稜がよく削り圓められてある。先端部は凡て甚だ鈍く圓くなつて居る。

一個は全長一八七耗、少しく廣くなつて居る頭端部の最大幅一二耗、同最大厚八耗、中途部幅九耗、同厚七耗あり、角幹の背面部にて一條の著しい縦溝に沿ふやうに割り取つたものより作られ、全長に沿うて甚だ丁寧に削り上げてある。一個は全長一五〇耗、頭端部最大幅一三耗、同厚八耗、中途部幅七耗半、同厚六耗あり、全長に沿うてよく削つてあれど、仕上げが劣り、頭端面が手を入れて無い。尙ほ一個は下大部を示す破片にして、幾分下膨れであり、先端上五〇耗の所に於ける兩直徑九耗及七耗あり、角の内曲面に沿うた部分より作られたものである。

更に一個は幾分廣い頭端部に穿孔を有するものである。全長一一五耗、頭端部最大幅一二耗、主なる穿孔の位置に於ける頭端部厚六耗、中途部幅九耗、同厚六耗ある。頭端面の一部は折り去つた際の折れ口の儘に残つて居れど、その他は丁寧に削り圓められてある。裏面——角としての内部——より先づ穿孔を試みて一旦中止した痕あり、恐らくは位置が氣に入らなかつた

ものであらう。完成の穿孔はこれに接して頭端に近い側にあり、裏面觀に於て大きく擂鉢狀をなして居る。恐らく質のより粗笨な裏面より特に深く穿ち、表面よりは淺く穿つて開通させたものと認められる。その直徑は裏面に於て七耗、表面に於て三耗半あり、又中止したものゝ裏面に於ける直徑は五耗ある。

角製短劍。 得られた一個は若い——恐らく二才——雄鹿の充實した角を以て簡單に作つた併も見事なものである。角の中途の後内側に一個の突起の著しきものが存し、これがその儘に鏑となつて、以て自ら劍身と擲とを區劃して居る。劍身の大部分はその儘に平滑であり、接把部及擲はその儘に粗糙である。擲頭の面は深く圓錐形の腔をなす様に扶り抜かれ、兩側面よりはこの腔に向つて大なる穿孔が通じて、下げ緒を通すやうに出來て居る。結局この腔と穿孔とだけが人工なのである。全長二二〇耗、劍身長大略一三〇耗、鏑の後面よりの擲長八八耗、劍身中途部直徑一一耗、鏑を含む最大直徑三一耗、鏑の直後に於ける擲直徑二二耗及一六耗、擲頭部直徑二〇耗乃至二二耗、擲頭面の腔の直徑一七耗、穿孔直徑七耗及八耗ある。

角製裝飾短劍。 得られた一個は鹿角の或る分岐部とこれを挟む角幹及枝とを利用して作つたものである。角幹も枝も分岐に面した側だけを採り、全體が鳥の頭部及頸の形に出來て居る。擲頭は分岐部及枝の基部より成つて鳥の頭部に象り、嘴は短く、側面觀に於ては切り込みが無けれど、上面觀に於ては縦の切り込みがあつて二叉になつて居る。これは上嘴及下嘴をば錯覺的に表現したものと認められ、斯の様な表現は古拙的乃至兒童の繪畫乃至彫刻に必ずしも稀ならず見受ける所のものに屬する。兩の眼は穿孔を以て示されてある。擲頭よりはこれ

を除いた特別の擣の分化なく、直に劍身に續き、劍身は鳥の頸に象つてある。全體が叮嚙に研磨され、纖弱に出来て居る。彫刻そのものは到つて簡單なれど、纖弱な事はこれが依然實用品としての要素に乏しい事を示して居る。嘴端より測つた頭部の前後長三五耗、頭部左右幅一七耗、同上下高一七耗、劍身最基部幅一三耗、同厚七耗、擣頭端より九〇耗の所に於ける劍身幅一〇耗半、同厚七耗ある。この裝飾短劍の型は後の時代に見られたさるものに對して祖型であつたものゝ如く、それに比しては勿論一層古拙的である。

猪牙切斷片。雄猪の下顎犬齒をば先端より或る長さにとつて切斷したものが一個得られた。切斷は牙の三面より刻み込んで成功したものであり、當時に於ては可成りの努力を拂つたものと認められる。長さは猪牙製懸垂裝飾品——特に腰飾——を作るに格好な程度である。この切斷片なりこれに偶したそれなりをば裝飾品に作らうために切斷した事であつたであらう。全長六〇耗あり、厚幅は牙の自然の儘にして、最大幅二一耗、最大厚一一耗半ある。

鹿下顎骨製裝飾品。齒の附ける儘の鹿の下顎骨水平枝の前臼齒及大臼齒列ある區域を採る様にして兩端を切斷し去つたものである。下顎骨の内部には齒溝が走つて居るから、これを腰飾の如き懸垂裝飾品とすべくば下げ緒を通す孔は自ら具つて居るのである。尤も裝身品としては少しく重いから、ともすれば屋内裝飾品であつたかも知れぬは勿論の事である。得られた一個は雌鹿の下顎骨に屬し、全長一二一耗ある。

本介塚の骨角器群に於ける一の消極的特徴はかの骨刺の部にて述べた一個の如きもの以外にはこれぞと云ふ銛や鏃の見

當らぬ事である。若し存したとしても甚だ尠からう事は疑無い。著者が曾つて發掘調査した何れの介塚に於けるよりも狭からぬ面積に亘つて作業を遂行したのであつたがこの次第なのである。この骨角器群が新しい頃のものに對して著しい庭徑ある事は明かである。唯大木式のものに對しては近似も多く、關係も淺からぬ事は勿論である。例へば角製篋に富んで居る事及角製の短劍類に或る著しさを認め得る事等はその尤なものと云ふべきである。但しこの二項に於てすらも角製篋がより丁寧に作られ、短劍類がより簡單乃至より古拙的に作られてあるだけの差異をば本介塚のものに認め得るのである。云はゞ日常雜用品と裝飾品との間に作り方の態度に差異を設けぬ所に本介塚の一特徴があり、さる事も勿論原的事項に屬すべきである。骨針が割合に多い事も注意に値すべく、牙製釣針及鹿下顎骨製裝飾品は珍しい事に於て重要であらう。

貝 輪

貝製品としては唯貝輪の存在だけが見られて居る。一個は赤貝の殻にて作られ、大形にして勿論訓乃至腕輪として用ゐられたるべきものである。最大直徑大略七九耗、孔の最大直徑六三耗、環の幅八乃至一二耗程のものである。このやうな貝輪は随分と永續したものである。

哺乳類及地質學的時代

哺乳類の遺骨乃至齒牙は尠からず産しその化石化の程度は介塚産のものとしては特に最も進んで居る。種類には次のやうなものがある。

(一) ヤマイヌ *Canis hodophylax* TEMMINCK.

(二) アヲシマイヌ(新稱) *Canis familiaris* L., Aoshima-breed.

中大の犬にして、下顎第一大臼齒——肉齒——の後踵が構造上甚だしく低く、その外面が豊に圓く彎曲して居る類ならず、急に屈折したやうになつて内に向つて傾き、その傾斜の度が特に著しい。下顎骨水平枝下縁の彎曲が強い。恐らくこれがヤマイヌより由來した犬であつたであらう。

(三) ヒタカミダヌキ(新稱) *Nyctereutes viverrinus* TEMMINCK
genitor, mut. nov.

本介塚産のものを以て模式とする。内地より知られた狸中の最大者である。口蓋は廣く、頭骨後半部なる若干の測定箇所、に於ける幅も大である。後頭上隆起は左迄強からず、後頭面上に底をなす様に突き出した類ならず、上に向つて反轉して居る。特に雄に於て餘計に著しい特徴として、後面觀に於ける後頭面上縁が可成りの範圍に平坦になつて居り、以て後頭面上半部が四角張つて居る。下顎骨上行枝の冠狀突起の後縁は後に傾かず、又その上後隅は單に圓く彎曲して居る。兩の下顎犬齒は上に向つて充分に開いて居る。

(四) アヲシマアナグマ(新稱) *Meles anakuma* TEMMINCK aoshimensis, mut. nov.

本介塚産のものを以て模式とする。下顎骨も臼齒列も大で

ある。上行枝の冠狀突起は大略三角形をなし、その後縁が直線的なるに近くして、且つ全く後に傾いて居ない。

(五) ツメヨワカハウソ(新稱) *Lutra lutra leptonyx* (HORSF.) (= *cinera* ILLIGER).

(六) ミコトキノシ、(新稱) *Sus nipponicus* MATSUMOTO *mikotonis*, subsp. nov.

本介塚産のものを以て模式とする。ヒラフキノシ、*Sus nipponicus nipponicus* と略々伯仲の大きさにして、頭骨顔面部の一對の縦溝がより短く、縦溝の後端をなせる眼窩上孔の互の距離は格別の事無く、顳顬窩間幅は特に著しく小であり、後頭上隆起上の頭骨後端幅もより狭い。下顎第二及第三大白齒の内側には補足錐が著しくよく發育し、その第三大白齒の後踵は雄のものと雖も比較的簡單の構造である。

(七) エゾアカシカ *Cervus* (Sika) *nippon matsumotoi* (KISHIDA).

以上の内ヤマイヌ、ツメヨワカハウソ及エゾアカシカは今日も存する種類ながら、第一は可成りに時代のさびを帯びた形に於て洞窟より産する事あり、第三は洪積世中期より既に産して居る。第二は頭骨及齒に於てもカハウソ *Lutra lutra lutra* より區別し得る特徴を示す故に區別して掲げた次第であり、後者と伴つて極めて廣く分布し、恐らくは後者と同一の取扱の下に舊くより産して居たものであらうと認められる。アヲシマイヌはその儘には大木式以降のイヌに對する祖型らしく無い。ヒタカミダヌキ、アヲシマアナグマ及ミコトキノシ、は凡て大木式以降に異つた型としての後繼者を殘して居る。斯くアヲシマイヌ以下の四種類は全く特有であり、本介塚の時代と後の時代との間に哺乳動物群としての著しい差異を示して居るのであ

る。大木式以降には斯のやうに著しい差異は認められぬ。この哺乳動物群が指示する如くんば本介塚の時代は洪積世最末期と認められて然るべきである。

貝類及氣候相

淡水産貝類なるカラスガヒ科に屬するものが甚だ多量に存し上部及下部の兩介層は云はば著しく腐朽したこれ等の貝殻片と粘土とが密に混和したものから成つて居るのである。大小の種類が含まれ特に中大にして殻の薄い Anodonta が多きを占めて居たやうであつたが、何分にもこれ等を標品となすべく採り出す事が出来なかつたのである。又シヤミの一種 *Corbicula nipponensis* PILS. の特に殻頂が著しく突出した型のものが存する。

尙はその外に海産貝類も甚だ少量ながら産するのである。その種類としては次の如きものが得られて居る。

Arca inflata L.

Meretrix petechialis (LM.)

Natica janthostoma DESH.

Rapana bezoar L. var. *thomasi* CR.

Cassis strigata (GMEL.)

以上の内最後種は温暖な氣候を指示するものと認められる。尙はこの海産貝類群を見渡した處、その貝殻が却々に厚手に出来て居る。或る同種のものにて比較するに陸前地方の大木式及それ以後のものは斯う厚手にはなつて居ぬ。恐らくは當時

の石ノ卷灣地帯の海水が特に鹽分に富んで居た事であらう。
鹽分に富める事も延いてはこれが或る種の氣候の影響であつたらうと考へられるのである。

埋 葬 状 態

此處なる遺跡は淺くして、人骨も淺く横はつて居るの一方或は桑畑として深く耕され或は根菜畑として深く掘られた地であるにより、人骨も削られて不完全になつたものが多い。それにも拘らずこの人骨が遺跡と同期のものであると認むべき證據は歴然たるものがある。人骨骼の番號は發見の順序に據つて居る。

第一號。熟年男子。略々眞東枕。頭及胴は仰向。兩上肢は臂を伸し脊柱に平行。兩下肢は膝を全く折り右下に傾倒。現在地表より頭迄の深さは目測一尺三乃至四寸。胴が殆ど水平である。

第一號人骨を横ぎつて地層の垂直斷面を作つて驗した觀察がある。介殼の甚だ豊富な層が下に在り、同じく寧ろ少量にある層が上に在り、更にその上には全く介殼の無い層があつて表面に續いて居る。第一を下部介層、第二を上部介層、第三を表層と區別し得る。人骨は全く上部介層に含まれて居たのである。上部介層はこの人骨を含む部分に於て下部介層に向つても表層に向つても膨凸して以てレンズ狀をなして居る。レンズ狀部の上下の厚さは一尺未滿である。下への膨凸は墓穴に該當し、上への膨凸は封土に該當すべきである。封土迄も明に上部介層の土である。表層は明に人體埋葬後に生成した層と認め

られる。

次に表層をば除去して、これを上部介層との境界面を露出させて見たのである。そこに横はるものは表層生成前の或る時期の地表及封土の表面に該當すべきである。封土は人骨骼體の長軸の方向に長い楕圓形の低い土饅頭なして居たのである。人骨骼體の高い部分なる頭骨上邊及膝頭はこの封土外の地表よりも幾分高い位置にまで突き出し封土に覆はれて居る許りに僅に露出を免れたと云ふ状態にある。その葬り方の淺かつた事が充分に推知し得るのである。扱尙ほこの人骨に限らず、十四體は凡て上部介層に含まれてあつたのである。

第二號。熟年女子。北五度東枕。胴は仰向、頭は仰向、前屈、僅に左下。兩上肢は臂を伸し脊柱に平行。兩下肢は揃へて膝を折り、左下。現在地表より頭迄一尺二寸。頭骨上邊と下肢骨の膝に近い部分とは桑畑耕作のために削られてあつた。

この人骨のあつた附近では上部及下部の兩介層が薄くなつてあり、上部介層からの下への膨凸は下部介層を突破して、その下なる基底層に迄喰ひ込んで居る。基底層は淡黝褐色の粘土より成り、遺物を含んで居ない。耕作によつて一部分削られはしたけれども、尙ほ上への膨凸があつた事もその上を表層が覆うて居た事も觀察されたのである。

第三號。熟年男子。南十度西枕。頭及胴は仰向。兩上肢は臂を伸し脊柱に平行。兩下肢は揃へて膝を折り、左下。現在地表より胸迄一尺二寸。頭迄一尺一寸。頭の上邊及下肢の一部分は根菜採取の鋤先に觸れて傷んで居る。

第四號。熟年女子。南十五度西枕。頭及胴は仰向。左上肢は臂を伸して脊柱に平行、掌は腰の下にある。右上肢は上膊が

脊柱に平行、臂を直角に折り、掌は腹の上にある。兩下肢は揃へて膝を折り、右下、但し少々膝を立てゝある。現在地表より頭迄一尺。顔面部及膝の部分は鋤先に觸れて居る。この人骨の右耳に當る位置に一個の土製耳飾があり、又右胸の上にも肋骨に直接して同じ耳飾があつた。右胸の上にあつたものは恐らく左耳に著けたものであらう。左の耳飾は埋葬後に柔軟部の分解に伴つて茲に移動したもののらしく、右の耳飾は正しくその位置にあつて耳に著けた儘葬られたものと認められる。

第五號。小兒。南十五度東枕。頭及胴は仰向。第四號人骨の腰帶の直上に重なるやうな位置にあつた。保存が悪い。

第六號。熟年女子。北三十度西枕。胴は仰向。頭は仰向、僅に右下。兩上膊は共に脊柱に平行、兩上肢とも臂を少しく内に屈し、兩掌とも腹の上にある。兩下肢は揃へて膝を全く折り、左下ながら膝を少しく立て、踵が臀に附いて居る。現在地表より頭迄八寸、腰椎迄一尺。頭が高く、腰が低くなり、膝頭が頭より僅に高く突き出て居る。兩の耳の位置に土製耳飾を帯びて居た。

第七號。小兒。南十度東枕。頭及胴は仰向。兩上肢は眞直に伸ばし、兩下肢は半ば膝を立てゝ右下。現在地表より頭迄七寸。腰に向つて低くなつて居る。

第八號。小兒。北十度東枕。頭及胴は仰向。兩下肢は揃へて膝を折り、右下。現在地表より胸椎迄九寸。

第九號。熟年女子。北十度西枕。胴は仰向。右上肢は上膊が脊柱に平行、臂を僅に内に屈し、掌は腹の上にある。左上肢は掘り移されて不明。兩下肢は揃へて膝を全く折り、左下。

第十號。熟年女子。東三十度南枕。胴は仰向。頭は仰向、前屈、少しく左下。兩上膊は脊柱に平行、右の臂は少しく内屈して

居る。現在地表より頭迄八寸、胸椎まで一尺五分。

第十一號。熟年女子。東二十度南枕。頭及胴は仰向。兩上搏は脊柱に平行、右の臂は少しく外屈、左の臂は少しく内屈し、兩前腕は互に平行。兩下肢は揃へて膝を折り、首方に向つて傾倒し、腹の上に横はり、僅に右下。現在地表より頭迄一尺、胸椎迄一尺三寸五分、腰椎迄一尺三寸。

第十二號。熟年男子。東十度北枕。胴は仰向。頭は掘り動かされて變位。兩上搏は脊柱に平行、左の臂は少しく内屈。兩下肢は揃へて膝を折り、左下。現在地表より胸椎迄一尺。

第十三號。熟年女子。東十度南枕。胴は仰向。兩上肢は臂を伸し、脊柱に平行。現在地表より腰椎迄六寸。

第十四號。熟年男子。北五度東枕。頭及胴は仰向。右上搏は脊柱に平行、右の臂は三十度の角に屈して掌が肩の近くに來て居る。左上肢は上搏と指骨のあつた位置とから見るに殆ど眞直に伸して脊柱に平行してあつた様である。下肢は膝を折つて右下に傾倒したらしい。頭迄約九寸。

以上を通觀するに、第一にその枕する方向は實に區々である。それにも拘らずある考察を以てすればこの區々たる裡に自ら或る系統立つたものゝ存する事を發見し得るのである。今試に一の方位盤を描き、この上にかの枕する方向をば點を以て示すとする。然る時はこの十四體が三群に分れて集合するを見るであらう。一群は北三十度西より北十度東迄の間を占めて五體を含み、一群は東十度北より東三十度南迄の間を占めて五體を含み、尙ほ一群は南十五度東より南十五度西迄の間を占めて四體を含んで居るのである。第一群は正に觀念上の北枕、第二群は同じく東枕、第三群は同じく南枕と認める事が出来るで

あらう。觀念上の北枕・東枕及南枕は數の上の甲乙を附け難い様に現れて居るが、觀念上の西枕は無い。兎に角に外觀區々たるやうに見え乍らも實はその方向を念慮に置きつゝ枕させたものである事が明である。

頭及胴は先づ仰向であり、折り曲げた膝は半ば傾けたものが多い事も認められる。

抜 齒 風 習

本介塚の人骨に於ける抜齒風習の有無及その様式に就ては既に二回に亘つて人類學誌上に發表し置いた事がある。左右何れかの上顎第二門齒を抜くの様式だけが知られたのである。例へば第一號及第十號人骨には左側のそれを抜いた形跡あり、第六號人骨には右側のそれを抜いた形跡があるのである。又第二號人骨は右側のそれが最初より發生しなかつたかの觀をなして、これを挟むべき第一門齒と第一——形態學上の第三——前臼齒とが變位もせず、密な列をなして居れど、これは特に若い内に第二門齒を抜いたが故に斯くなつたのであるかも知れない。但し勿論天然に斯くある事もある筈である。

環 境

本介塚の時代が温暖であつたらうとは述べたが、それが如何なる程度のものであつたらうか。今日の狀態に於てかの海産

貝類は關東附近に近かつたらう事を示せど、エゾアカシカの存在は下野境附近乃至より北寄りであつたらう事を示して居る。斯のやうな次第であるから、當時の此處の氣候は恐らく今日の狀態に於ける關東及東北の境界附近のそれに似たものがあつたであらう。

海産の貝殻が特に厚手にして海水が鹽分に富んで居たらうには、それは外海よりも圍まれた海に於て然るべき事に屬する。ともすれば局部的の水陸の配置に今日とは幾分異なるものがあつたのでは無からうか。海産貝類にして食料品として左迄著しいものに非ざる種類までが含まれてある所を見れば、恐らくこれが交換乃至販賣に據る到來では無く、部落人自らが出懸けて行つて採取したものと覺しい。而してその存し方が此處の今日に於ける海との距離よりも若干近い所まで當時の海が來て居たらうと見る方が都合よさうである。ともすれば洪積世が終るための汀線上昇に際してのその最高潮期に近く本介塚の時代が當つて居たのでもあらう。

圖 版 說 明

第 一 版

第一圖 石槍

第二圖 長矩形磨製石斧

第三圖及第四圖 有背溝磨製石刀

第五圖 動物岩偶

第六圖及第七圖 第六號人頭骨に附けりし土製耳飾

凡て自然大。

第 二 版

第一圖 角製裝飾短劍

第二圖及第三圖 角製簞

第四圖 骨刺

第五圖 骨簞

第六圖 猪牙切斷片

第七圖 牙製釣針

凡て自然大。

第 三 版

第一圖 角製簞

第二圖 角製裝飾短劍

第三圖乃至第五圖 骨針

第六圖 鹿下顎骨切斷片

第七圖 長頸甕型土器

第七圖は三分の一外自然大。

第 四 版

- 第一圖 鹿下顎骨切斷片
 第二圖 原曲邊深碗型土器
 第三圖 長頸甕型土器
 第四圖 寬口長頸甕型土器

第三圖は三分の二外自然大。

第 五 版

- 第一圖 長頸甕型土器
 第二圖 有襟壺胴狀碗型土器
 第三圖 有刻紋土製圓盤

第二圖は四分の三外自然大。

第 六 版

- 第一圖 有刻紋土製圓盤
 第二圖及第三圖 有紐土製圓盤
 第四圖 滑車形土器
 第五圖 土製蓋
 第六圖 小桶狀碗型土器

第二圖及第三圖は三分の二外自然大。

第 七 版

- 第一圖 滑車形土器
 第二圖 圓石
 第三圖及第四圖 長矩形磨製石片
 第五圖 兩頭打製石斧

第六圖 石錐

第七圖 石鏃

第二圖及第五圖は三分の二、外自然大。

第八版

第一圖 土製耳飾を帯びたる儘の第四號人頭骨、大略右側面觀

第二圖 鉢狀婉曲邊碗型土

共に二分の一。

第九版

第一圖及第二圖 牽牛花狀碗型土器

第三圖 牽牛花狀高坯型土器

第一圖は二分の一、第二圖は三分の二、第三圖は自然大。

第十版

第一圖 牽牛花狀碗型土器

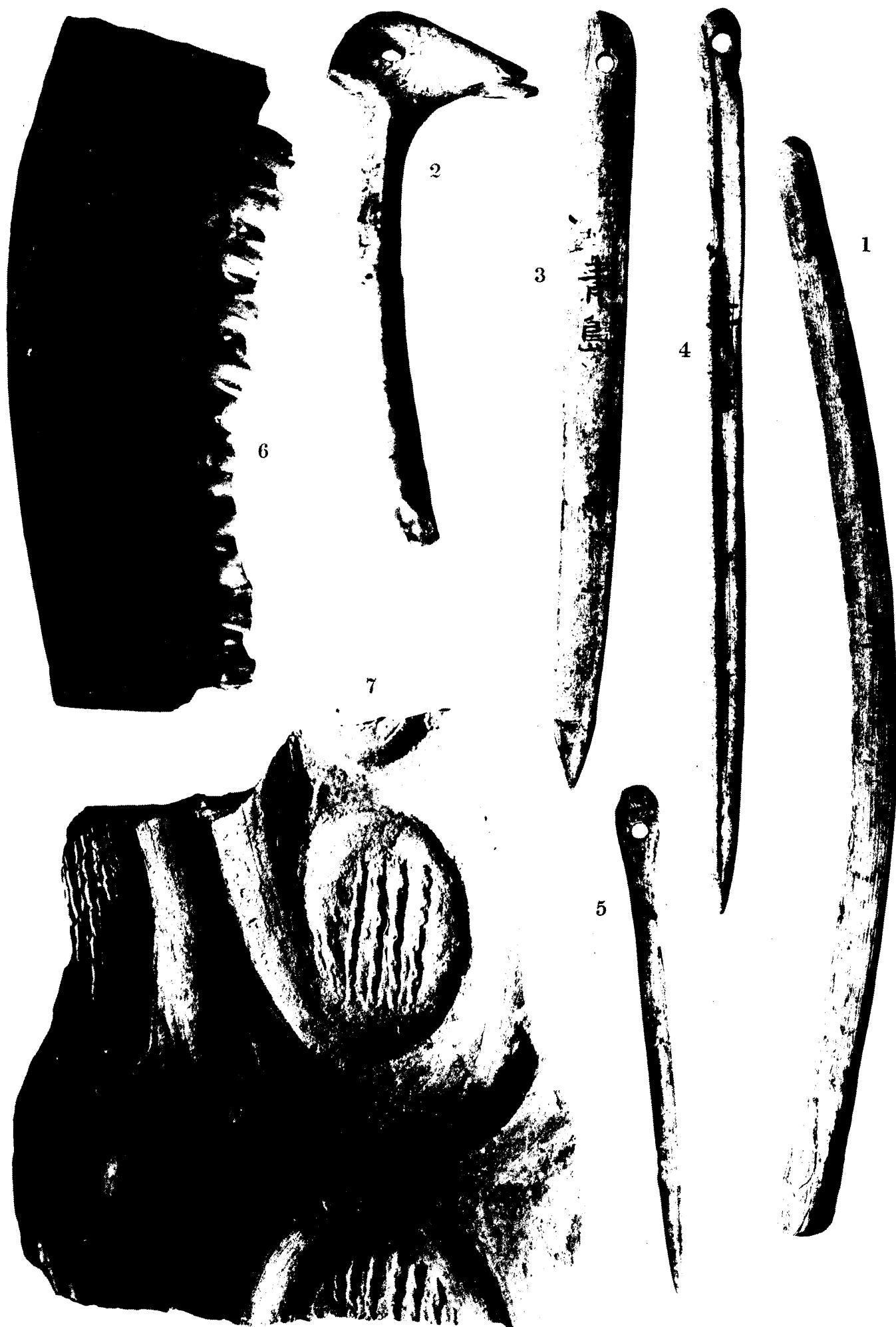
第二圖 長頸甕型土器

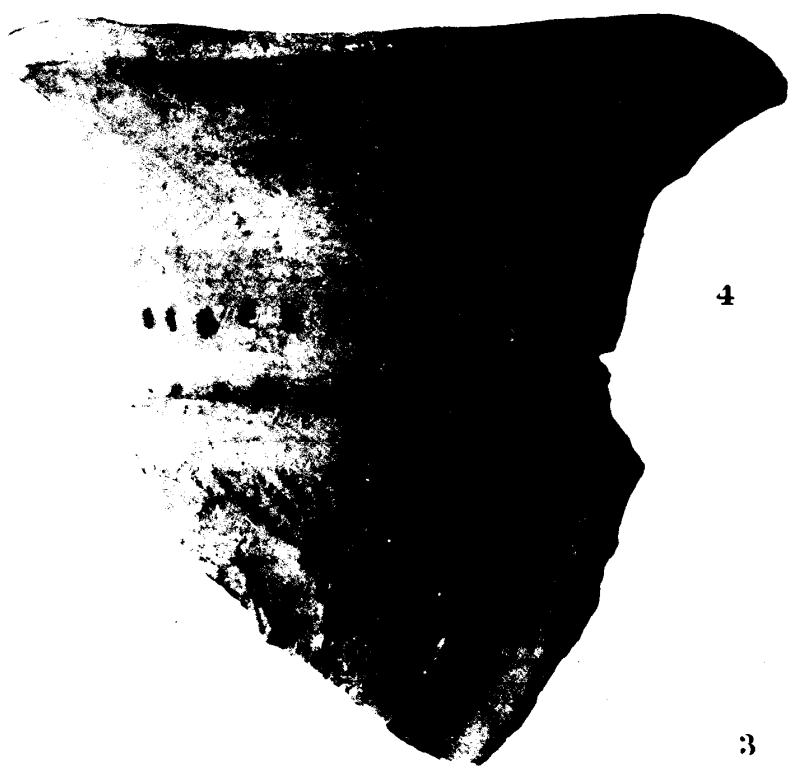
第三圖及第四圖 介一種 *Cassis strigata*.

第二圖は三分の二、外自然大。









3



1



